

新潟市水族館の管理に関する基本協定に係る

令和4年度 業務報告書

1. 入館状況について

令和4年度総入館者数 514,910人(対前年度比 123.0%)

指定管理者として5年間の指定管理期間のうち、4年目の管理運営を行った。コロナ禍の中でも充実した施設を活用し、豊富な経験・知識・技術を持った職員による適切な管理運営に心掛け、お客様の安全・安心を第一に考え、満足度向上に努めた。

令和4年度も新型コロナウイルス感染症の影響を受けた1年であった。新規感染者数が増減を繰り返す中で、基本的な感染防止対策を継続して行き安心安全な管理運営に努めた。

入館者の状況については、ゴールデンウィークは3年ぶりに行動制限を求められることがなく、最大で10連休の取得も可能であったことから、帰省客や行楽で県外から来館されるお客様などで館内が久しぶりに賑やかとなった。夏休み期間の新規感染者数の増加や年末の大雪の影響があったものの、臨時休館や中止した事業もなく、最終的な入館者数は514,910人、対前年度比123.0%と増加し、コロナ禍前の水準に回復した。また、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標である入館者数500,000人以上を3年ぶりに達成した。3月13日以降、マスク着用がお客様の判断となり、5月8日からは感染症法上の位置づけが「2類相当」から「5類」に移行され、さらなる入館者増が期待されることから、安心して何度も来館していただけるよう努めていきたい。

また、年間パスポートは、過去最高であった令和3年度の14,992人をさらに1,037人上回り、16,029人のお客様から購入していただいた。積極的な宣伝やキャンペーンの実施、さらに口コミによる効果が現れているものと推測され、購入者が増え続けていることは、新潟市の施設を管理する指定管理者として大変嬉しいことである。パスポート所持者の平均年間来館回数が1人あたり5.5回であることから、パスポート購入者の増が入館者数の増に結びつくものと今後も期待できる。

申請や手帳による減免での入館者は、「身体障がい者等手帳」「高齢者施設」「小・中学校」「保育園・幼稚園等」など全てで昨年度を上回り対前年度比137.9%となった。減免利用者総入館者数は、18,009人で総入館者に占める減免利用者の割合は3.5%となっており、コロナ禍前には回復していないものの、館の果たすべき社会的役割は依然として大きいと考えている。

今後も、常におもてなしの心を持ち、「行ってみたい」「来てよかった、また来たい」と感じてもらえるようなサービス提供を心掛け、新たなお客様の獲得とリピーターの確保に努めたい。

2. 施設の管理運営状況について

(1) 臨時開館・閉館及び開館時間の変更

臨時開館・閉館及び開館時間の変更については、新潟市水族館条例に基づき適切に実施した。繁忙期における開館時間の繰り上げは、今年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止対策として、来館者の密を避けることを考慮し実施した。朝早くの来館を希望されるお客様へのサービスの提供と感染症拡大防止対策という目的を十分に果たしたものと考えている。

ゴールデンウィークは、5月1日(日)から5日(木・祝)の間、開館時間を60分繰り上げた。次に7月の3連休の16日(土)～18日(月・祝)及び夏休み期間中の週末の7月23日(土)、24日(日)、30日(土)、

31日(日)、8月6日(土)、7日(日)さらにお盆期間の11日(木・祝)～16日(火)、並びにシルバーウィークの9月16日(土)～18日(月・祝)と23日(金・祝)～25日(日)にも開館時間を60分繰り上げた。入館者が増加することで館内が密となることから、時間帯ごとの平準化や周辺道路の混雑緩和に有効であった。

正月の1月2日(月・祝)・3日(火)は、例年どおり臨時開館を実施した。みなとトンネルからの人の流れも多く、マリニピア日本海の周辺道路は、護国神社の初詣客で、三が日は朝早い時間から混み合う。初詣帰りの来館者も一定数(2日間で3,564人)あり、正月開館は定着しているため今後も実施していきたい。

電気事業法第42条に基づく電気設備法定点検を行うため、例年どおり3月第1木曜日とその翌日である3月2日(木)・3日(金)を臨時休館した。それ以外の点検や工事については、開館時間内も含めお客様の妨げとならないよう工夫しながら行った。

新型コロナウイルスの感染法上の位置付けが「5類」に引き下げられた後も開館時間の変更については、お客様の入館動向を把握し、適切に開館時間の繰り上げ又は延長を実施し、費用対効果を図りながら市民サービスに努めていきたい。

(2) 展示生物について

協定書の仕様書に謳われている約500種、20,000点の魚類、海獣その他水生生物の飼育展示規模を維持するとともに、展示内容の魅力の向上に努めた。

令和3年度に引き続き、新型コロナウイルス感染拡大による県外への移動制限等で生物交換や採集活動に制約を受けたが、魚類輸送専用車両を計画的に運用し、展示コンセプトに沿った沿岸性魚類や深海性魚類、温帯・亜熱帯性魚類等を入手した。

飼育困難生物の飼育展示にも積極的に取り組んだ。他園館とのROV(遠隔操作無人探査機)を使った共同調査で佐渡周辺海域での生息を確認していたシキシマハナダイとアズマハナダイを遊漁船での釣り採集で収集し、展示した。アオリイカの展示は令和4年度も行い、交接、産卵行動まで来館者に見ていただくことができた。新潟県内各地の漁業協同組合の協力により、特に深海性生物の収集、展示に努めた。アバチャン、トゲビクニン、イサゴビクニン、ヤセテングトクビレ、コンペイトウ等の魚類の他、オキノテヅルモヅルや日本海固有種である両津湾産サラサベッコウタマガイを展示した。

国内希少種に指定されているコシノハゼを生息地の把握と生態の解明、啓発等を目的に環境省より許可を得て令和3年度より展示している。

また、飼育下で繁殖した生物を積極的に展示した。アカムツ(通称＝ノドグロ)は人工育成技術開発を継続し、育成個体を本館地下の「暖流の旅」ゾーンの水槽に群れで常設展示している。ホトケドジョウ、シナイモツゴ、キタノアカヒレタビラ、キタノメダカを「信濃川水槽」で展示した。8月には、4年連続となるカマイルカの繁殖に成功し、現在も母仔ともに良好な状態を維持している。また、フンボルトペンギンは血統更新のため他施設との個体交換を実施し、その個体を含めたペアの繁殖を含めて3個体が成育している。

「にいがたフィールド」で「にいがたフィールドガイド」を6回実施し、季節ごとの観察ポイントや自然繁殖したシナイモツゴ、キタノメダカなどの紹介を行った。

今後とも、開館以来の管理運営により蓄積してきた豊富な知見に基づき、創意工夫を重ね、展示生物の充実や、入館者に対する正確かつタイムリーな情報提供に努めていきたい。また、常に新鮮味のある展示を心掛け、リピーターにも十分満足してもらえるような魅力あふれる展示を行っていきたい。

(3) 通年事業の実施状況について

① ペンギン解説

ペンギン散歩道(令和4年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止対策のため、通年ペンギン海岸で実施)でペンギンが歩く様子等を見ながら、分類や生態、生息地の環境、フンボルトペンギンが絶滅に瀕している背景、水族館における域外保全活動・繁殖の実施等について解説している。実施場所は屋外観覧導線に面しており、およそ10分の解説時間中に気軽に立ち寄って解説を聞き、満足すると立ち去る来館者も多く、実施規模の割に参加人数の多いイベントとなっている。

② イルカショー

時刻を定めて解説を行う行動展示で、高い展示・教育効果が期待される。

水生哺乳類の自然史や環境との関わり、飼育下の健康管理、トレーニングなどを解説し、来館者の水生野生生物への理解を促し、環境保全への関心を高めてもらうことを目的としている。

ハンドウイルカ2~3頭、カマイルカ1~4頭を用いて1日に4~5回行っているが、令和4年度も新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、来館者のショーへの参加は取りやめ、また普段よりも短い1回10~15分の構成とした。内容は短いながらもイルカの種類、体の特徴、認知、運動能力などを解説し、楽しみながら自然に学べるショーを心がけた。また当館生まれのカマイルカも積極的にショーへ参加させ、イルカの成長をご覧いただけるよう心がけた。

密集を避けるため、ドルフィンスタジアムのシートには間隔を空けた着席を促すサインを貼り、ショー前には観覧者の協力を呼びかけるアナウンスを追加した。イルカに関する疑問が解消できるようショー後に設けている質問受付は、ビニールシート越しに実施した。

カマイルカの出産に伴い8月9日~17日の9日間ショーを中止した。また冬季のイルカショーは通常であれば屋内プールで開催のところを密集回避の目的から全日程屋外で実施した。観覧には厳しい日もあったが、来館者の安全を確保するための対策として理解いただいている。毎月実施しているアンケート調査でも、概ね高評価をいただいている。

③ マリンサファリ給餌解説

アシカ科最大の種であるトを用いて1日2回、形態や生態、野生の状況、人との関わり等についての解説を実施している。鰭脚類の特徴であるヒレ状の四肢や水の抵抗を受けにくい体の形などを来館者が見やすいよう行動形成し、また、体の大きいオスを中心としたハーレムを形成する繁殖生態、現在の野生での生息状況、漁業被害と保全の難しい関係性などについて最新の調査結果等から得られた情報を基に解説した。

④ ひれあし類解説

アシカの体調悪化に伴い、令和4年度は実施していない。

⑤ 日本海大水槽解説

展示生物の紹介から水族館のしくみまで多面的な情報を伝えるプログラムとして、日本海大水槽前で解説を行っている。解説の内容は固定せず、新規の生物が展示されたり、繁殖行動が見られたりしている時などは、積極的に紹介するように努めている。生物の生態だけでなく、飼育設備など水族館の仕組みについても理解を深めてもらう良い機会となっている。

⑥ 磯のいきもの解説

磯の体験水槽で、生物を1日1回、解説を交えながら間近で観察してもらう構成としている。令和4年度もマダコの解説をプログラムに加えた。腕だけが出せるように作製した特製の水槽にマダコを収容し、吸盤を軽く触ってもらう体験を実施した。生物にも参加者にも負担や危害の及ばない良好な方法で、実施することができた。解説では、透明プラケースに対象の生物を入れ、体のつくりが観察しやすいように工夫し、多くの来館者に興味を持って生物に接してもらえるよう心掛けた。来館者と直接対話するプログラム構成は、生物の扱い方や生息環境への理解を深めるのに有効であると実感している。

⑦ アクアラボ体験

顕微鏡やカメラ、大型液晶モニターを用いて、生体や標本の観察、解説を行うなど、ハンズオンを取り入れたプログラムとして行っている。哺乳動物から無脊椎動物まで幅広い生きものをテーマに日替わりで実施することで、水生生物に対する知識と理解を深めてもらう良い機会となっている。令和4年度は、新たに6タイトルを追加して実施し、水生生物の知識普及に積極的に努めた。

(4) 生物展示関係イベント等の実施状況について

① マリンピアカレッジ

1. 柳都新潟 森と海をつなぐ川沿いの森林

日本自然環境専門学校の指村奈穂子氏を講師に招き、川沿いの森林の生態と機能について解説していただいた。新潟の川沿いにたくさん生えるヤナギを題材に、森林が作り出した養分が川から海へ流れることで豊かな海が形成されることを学び、川沿いの森林の機能や役割について理解を深めていただいた。ヤナギに関しては、葉っぱのしおりに作ったり、花を顕微鏡で見たりする時間を設け、楽しみながら学べる要素も加えて実施した。健全な森林環境の大切さについて知る良いきっかけとすることができた。

2. 海と川を行き来する小さな回遊魚たち

新潟大学佐渡自然共生科学センター臨海実験所の飯田碧氏を招いて、佐渡の河川に生息する魚類(ハゼ/カジカ/アユ類等)を中心に、海と川を行き来する通し回遊性魚類の生態について講演していただいた。講演に加え、信濃川水槽と育成室のシロウオの見学を組み込み、耳石などのハンズオンも使用した。参加者の評価は高く、講演に興味深く耳を傾ける様子が見られた。身近な河川に生息する魚類が通し回遊を行うという事例を紹介することで、身近な環境や生物の生態に関心を持つ機会を提供できた。

3. トゲのある不思議な魚を知ろう

NPO 法人五泉トゲソの会理事の樋口正仁氏を招いて、トゲソの生態や形態を中心に、進化や保全の講演をしていただいた。また、樋口氏が持参したトゲソの標本の解説や、事前に採集していたトゲソの水槽観察、ペーパークラフトの作製なども行なった。内容がやや難しかったが、多くの方は最後まで熱心に参加していた。かつては身近であったが現在は急激に数を減らしている種に関するイベントのため、今回の知見を活かし次につなげられるよう努めたい。

② 企画展示

1. 新潟のタナゴ

新潟県に生息するタナゴ類全 5 種と、産卵母貝のイシガイ類生体 2 種、標本 5 種、産卵母貝のグロキディウム幼生の宿主魚類 2 種を展示した。生態をはじめ、在来種が減少し、外来種が増加している現状、新潟県では絶滅したとされていたが、近年一部の地域で生息が確認された種の人為的な移入による問題、当館のタナゴ類の繁殖について紹介した。タナゴ類の生息にはイシガイ科貝類だけでなく、グロキディウム幼生の宿主となる魚類が生息していなければならないなど、生物多様性の高い環境が必要であり、身近な水辺の生物多様性の大切さについて伝えた。

2. 隈の魚 クマノミ

日本近海のクマノミ類を紹介し、本種の生態について関心をもってもらうことを目的として実施した。日本近海に生息するクマノミ類 6 種、共生するイソギンチャク類や海外に分布するクマノミ類の生体を展示し、併せてそれぞれのクマノミ類の分布や特徴をパネルで紹介した。クマノミ類の分類、オスからメスへの性転換や卵を保育する習性、イソギンチャクと共生する理由などを、解説パネルやモニターを用いて詳しく紹介した。クマノミ類は、アニメ映画の影響や、その見た目やイソギンチャクに隠れて生活する様子などから注目度の高い生き物である。本企画展示を通して本種の生態について詳しく紹介することで関心を持ってもらうことができたと考えている。

3. フォトコンテスト受賞作品展

募集期間 2022/7/1~11/11(応募点数 122 点)

展示期間 2022/12/9~2023/2/26(展示点数 121 点)

マリニピア日本海で撮影した写真の公募コンテストで、今回が 8 回目の開催。入賞作品の展示を冬期のオフシーズンにすることで、長期間に渡って話題作りとなることを想定して実施した。前回までは 1 人で複数点の応募が可能であったが今回は 1 人 1 点の応募に変更した。応募者数は前回の 137 名に対し今回は 122 名であった。

4. カマイルカの繁殖 妊娠・出産・成長の記録

2019 年から 2022 年の 4 年間連続で当館で生まれたカマイルカを詳しく紹介する企画展示である。カマイルカの繁殖を「出産前」「出産」「仔の成長」「仔の比較」「研究」と 5 つのテーマに分けて写真や動画を使用しながら紹介した。特にカマイルカの出産前は、卵胞の成長と排卵の様子や妊娠中の胎児の様子をエコー動画や画像を用い、普段見ていただくことができない情報を発信している。仔 4 頭を比較することで、同種であっても個体ごとに違う点や大体同じところをデータとして見るができるように心掛けた。また実際のカマイルカは近くで見ると大きいということを感じてもらえるように、等身大の写真や模型を展示し、低年齢の来館者にも肌で感じてもらうよう工夫した。研究の分野では、仔が発する音の変化を実際に聴いてもらえるように iPad を用いハンズオン形式の展示とした。ショーとは違った形でカマイルカを知っていただく機会となることを期待している。

③ いきもの教室

生物への理解と環境への関心を高めることを目的に観察や体験を通したプログラムを実施し、5月から2月の間で、全6回、毎回異なるテーマで行った。対象年齢を小学生以上に設定したことで多くの方が親子で参加され、小学生低学年の子供にも分かりやすい内容とした。また、定員に対する平均応募率は218%で、大変人気のあるプログラムとなっており、参加後のアンケートでは、90%以上の方が「とてもおもしろかった」「今度またぜひ参加したい」と回答され、特に1月の「鳴き声に注目」では、年間パスポート所有者の方から「何度も来ているが注目するポイントが増えた」との感想をいただき、新しい形で生きものを観察するきっかけづくりができた。

④ にいがたフィールドガイド

新潟市近郊の陸水環境や生息する生物を紹介し、地域の自然環境に関心を持つ機会を提供すると共に、展示施設「にいがたフィールド」をより深く知ってもらうことを目的に8月を除いた4~10月の第3土曜日に実施した。季節に応じて見頃となる植物や、よく見られる生物(主に昆虫)をピックアップして紹介したり、蓮シャワーや植物の種子などの小道具を用いて体験を加えたり、できる限り季節に合わせて毎回異なる解説を加えた。解説の終盤には砂丘湖に仕掛けた罟と一緒に引き揚げてプラケースに移して解説と観察を行い、短時間ではあるが直接魚に触れる体験も行った。四季を通じたフィールドの環境や生物の様子を見ることで、環境・植物・希少生物の域外保全などを学ぶ機会とすることができた。

⑤ 記念日イベント

1. ペンギンの日イベント

4月25日の「世界ペンギンの日」に合わせて、直近の土曜と日曜である4月23日・24日にもっとペンギンを知ってもらうイベントとしてバックヤードツアーと擬卵作りを実施した。また、4月23日から5月27日までの期間、アクアラボで解説パネルと標本の展示を行った。バックヤードツアーは1日2回各回4組限定として応募者から抽選し、4回合わせて16組42人が参加した。普段は見られない飼育の裏側を見ながら飼育の工夫等を解説した。擬卵作りは1日2回各回20人程度を定員として、4回合わせて25組66人が参加した。擬卵を作りながら、ペンギンの繁殖や血統管理、擬卵を使う理由などを解説した。今後も継続的に実施して、あまり知られていないペンギンの生態や形態、野生の状況などについて、ガイドツアーやクイズを通して楽しみながら知ってもらい、ペンギンをきっかけとして生物の生息環境に関心を持ち、さらに身近な自然環境に興味を持ってもらう機会としていきたいと考えている。

2. カワウソの日イベント

5月の最終水曜日が国際カワウソ生存基金により「世界カワウソの日」と定められていることから、直近の土曜と日曜である5月28日・29日にもっとカワウソ類を知ってもらうイベントとして特別解説、毛皮触り体験、缶バッジ作りを実施した。また、5月2日から6月30日までアクアラボで解説パネルの展示を行った。特別解説はカワウソ類の形態や生態、野生の状況などについて1日1回カワウソ水槽前で解説し、2日間の参加者は約160人であった。また、毛皮触り体験ではカナダカワウソとラッコの毛皮に触ってもらい、感触の違いを感じてもらったうえで毛皮を目的とした乱獲の話や参加者からの質問に答えた。缶バッジ作りは1日限定150個として実施し、2日間で251個を作製した。持ち帰った缶バッジを見ることで、カワウソのことを思い出してほしいと考

えた。今後も継続的に実施して、より多くの人々が身の周りの自然環境について考えるきっかけにしたいと考えている。

⑥ 田んぼ体験（田植え、稲刈り・稲架掛け、脱穀、わら細工）

にいがたフィールドに造成されている田んぼで田植えから稲刈り・稲架掛け、脱穀までの稲作の体験と収穫したわらを使ったわら細工体験を行った。今回は 8 回目の実施となる。当館の事前募集プログラムとしては希少な 4 歳以上という幼児も対象にしたプログラムであることから幼児を含む親子の応募が多く、応募数は定員 10~11 組のところ 48 組の応募があった。令和 3 年度は荒天のため脱穀が中止となったが、令和 4 年度は全てのプログラムを実施することができた。例年と同じく、参加者の満足度は高かった。田植え、稲刈り・稲架掛け、脱穀、わら細工と稲作の一連の流れを体験でき、またそこにいる生きものと田んぼとの関係なども観察できることから、環境教育としても十分機能していると考えられる。

⑦ 野外体験教室

1. 貝の標本づくり

採集や標本作成の経験を通し、自然環境と野生生物に関心を持ってもらうことを目的に毎年実施している。例年水族館の地先海岸の岩場で採集を行っているが、令和 4 年度は荒天のため、安全を考慮して屋内のみのプログラムで行った。事前に採集しておいた貝類を収容した水槽を設置し、生息環境を写真で紹介することで、野外体験ができなくても知識が得られるような工夫をした。アンケートに「屋外にいけず残念であったが、代わりに色々な話が聴けて良かった」「雨天ならではの内容が盛り込まれていた」「貝の体の構造を知ることができた」とあり、水族館周辺に生息する野生生物に興味・関心を持ってもらうきっかけ作りができた。

2. 潟の生きもの観察会

水生生物の観察を通し、新潟市が誇る水辺環境である里潟の価値と魅力を伝えることを目的に実施した。公園として整備されていて水辺環境へのアクセスがしやすいことから、上堰潟公園を会場として実施した。短時間で、十分な種数と個体数の生物を採集することができ、身近な水辺に多様な生物が生息していることを紹介できた。プログラムには地元「上堰潟公園を育てる会」などの協力を得て田舟体験も加え、潟の文化についても学べる機会を取り入れた。継続して実施することにより、完成度を高め、人と自然が共存する潟（池沼）の価値と魅力を、より詳しく多くの人に伝えていきたいと考えている。

3. 海辺の漂着物探索

水族館の地先海岸の砂浜で、漂着物を収集・観察し、漂着物がどこから来たのか考えて、海の流れやつながりについて興味を持ち、また海の保全について意識を高めることを目的として実施した。

海岸で収集した漂着物の分類、小さな漂着物を、特にマイクロプラスチックに注目して、砂と仕分ける作業などを行った。アンケートに「たくさんの漂着物があることに驚いた」「海洋プラスチックの問題などとても勉強になった。夏休みの自由研究にも良い」とあり、地域の自然環境や海ゴミ問題に興味を持ってもらうきっかけを作ることができ、有意義なプログラムであったと実感している。

⑧ ナイトツアー

通常見ることのできない閉館後の夜の水槽の様子を観察してもらい、昼と夜での生き物の活動の違いや外観の変化等をツアーガイド形式で解説するプログラムとして毎年度実施している。令和4年度は、8月と9月に2回ずつ計4回実施する予定であったが、新型コロナウイルス感染症の拡大により中止となった。本プログラムは人気が高いため、次年度の継続を考えている。

⑨ イルカバックヤードミニガイド

10月8・15・22・29日の土曜日の4日間、11時30分から12時15分の45分間のプログラムで開催した。入口での混雑を避けるため、屋内プールで10時30分から抽選を行い、参加者を決定した。抽選は昨年までの箱からくじを取り出す方式から、iPad使用に変更した。なお受付時に配布した抽選券は記念品として参加希望者全員に持ち帰ってもらった。開催時期もよく、ガイド時間を45分とゆっくり見ることができるプログラム内容としたため、参加者した98.3%の方から面白い以上の回答を得ており、またリピート希望率も98.3%と高かった。参加者の年齢層は、小学校低学年までの子供とその保護者が最も多く、また大人のみ参加も見られた。幅広い年齢層に対応できているプログラムであり、イルカショーでは伝えきれない飼育の裏側を紹介できる機会であるため、今後も継続的に開催する予定である。

⑩ 育成室開放

11月から3月の第3土曜日に、通常入ることのできない育成室を職員立会いの下、入館者に開放した。新型コロナウイルスの影響を考慮し、入室者数を入口でコントロールしながら実施した。育成室内には解説パネルを設置したが簡易なものとし、参加者が注目している物に対して職員が解説を行なった。特に質問の多い物や注目してほしい物には大きめのパネルを用意した。11月から3月まで、育成室前・地下インフォメーション横・受付横に案内を掲示したため、以前に比べて参加者が大幅に増加した。水生生物への関心を深めてもらう機会として継続を考えている。

⑪ ミナミイワトビペンギン解説

ペンギン海岸観覧席を利用し、現在展示していないミナミイワトビペンギンを実際に見てもらい、観察しながら形態や生態について解説した。令和3年度はペンギンの散歩道で行ったが、令和4年度はペンギン海岸観覧席で実施し、間近で見ることが出来たことから多くの方が熱心に観察し、質問も多く寄せられた。ペンギン掲示板にミナミイワトビペンギンの情報も載せ、知識の普及に努めた。

⑫ 大人向け教室

1. 写真教室

フォトコンテストと連動する形で実施した。水族館の楽しみのひとつとして写真撮影があるが、アクリルガラス越しであることや暗い中での撮影のため、綺麗な写真を撮影することがとても難しい。しかし、これらの難しさはカメラの設定や撮影する際のちょっとした工夫によってある程度改善することができる。それらの「工夫」について、職員がレクチャーすることで水族館での楽しみ方の幅を広げてもらう。

2. 車イス利用の大人のための水族館講座

定員 5 名に対して当事者 4 名(+介助者 4 名)が参加した。実際に実施してみて、4 名+介助者 4 名で 8 名となることから、バックヤードなどの見学を考えるとこのくらい的人数がベストではないかと感じた。過去に実施したバックヤードツアーは車イス利用者を対象としていなかったが、オーソドックスなルート(調餌室や日本海大水槽機械室など)は全て車イスでも問題ないことが確認できた。アンケートでは参加者の満足度も高く、全員が「とても面白かった」「面白かった」を選択した。また、介助者からも高く評価する意見が寄せられた。

3. 年間パスポートユーザー向け 大人のための水族館講座

令和 3 年度は新型コロナウイルスの影響で中止したプログラムである。応募者は定員を 12 名超え 32 名が応募し抽選を行った。年パス保有者向けということで、他の大人向けプログラムではルートに入れぬイルカのバックヤードを案内するなど、差別化を図った。そのためか、参加者の満足度も高く、アンケートでも 15 名が「とても面白かった」、5 名が「面白かった」を選択した。

4. 大人のための水族館講座

「年間パスポートユーザー向け」との対比として、高校生以上という条件のみで募集したプログラムである。応募者は 12 名で当日の参加者は 11 名であった。過去にも実施したオーソドックスな大人向けプログラム(座学とバックヤード見学の組み合わせ)を行った。アンケートでは全員が「とても面白かった」「面白かった」を選択した。

5. 大人の視覚障がい者のための水族館講座

定員 6 名に対して当事者 4 名(+介助者 3 名)が参加した。介助犬も 1 頭参加したが、館内見学の際にも他の来館者からのアクセスなどもなく問題なく実施できた。視覚障がい者向けは令和 3 年度に続き 2 回目であることから、1 回目の反省点(触察の順番で混乱するなど)を修正して行った。参加者の満足度も高く、アンケートでは全員が「とても面白かった」「面白かった」を選択した。介助者の評価も高かった。

(5) 企画イベントの実施状況について

① 2023 年オリジナルカレンダープレゼント

毎年恒例のプレゼントとして、11 月 20 日から希望する方先着 1,200 名へオリジナルカレンダーをプレゼントした。

② クリスマスツリー展示

11 月 9 日から 12 月 28 日の間、マリニピアホール(円柱水槽側)に高さ 4.5 メートルのクリスマスツリーを展示した。なお、コロナ禍前に実施していた新潟青陵大学アカペラサークルによる点灯式及びクリスマスミニライブは新型コロナウイルス感染症拡大の影響により実施を見送った。

③ 門松展示

1 月 2 日から 7 日の間、正面入口に門松を設置し、お正月の雰囲気を出した。

④ 新成人キャンペーン

1月2日～15日の間、成人式会場で配付したクーポン券チラシやスマートフォンなどで当館HPのクーポン券などを提示した新成人及び同行者1名を無料入館とした。また、館内レストランの割引クーポン券も併せて配付した。期間中、188人の新成人とその同行者164人が来館した。

⑤ 年間パスポート販売キャンペーン

毎年実施しているキャンペーンで、年間パスポート購入者へ館内ショップ・レストランで使用できる割引クーポン(大人500円分、小人200円分、幼児以下にはシール)をプレゼントした。期間は1月16日～2月15日とした。期間中1,940人が購入し、令和3年度の2,700人、令和2年度の2,013人を下回り、次年度はさらなるPRの工夫が必要である。

⑥ カマイルカ(2021、2022生まれ仔)愛称募集

2021年7月13日に生まれたメスのカマイルカの愛称募集を2022年3月14日～4月10日まで館内で実施した。応募総数1750通の中から、「サチ」に決定した。名付けてくださった中から1名の方に年間パスポートをプレゼントした。

2022年8月9日に生まれたメスのカマイルカの愛称募集を2023年3月10日から館内で実施している(募集終了は2023年4月16日予定)。

(6) 専門的な調査・研究等について

「魚類等の繁殖・育成に関する調査」「鯨類の生理に関する調査」等、飼育水族に関する様々な調査研究を行っている。また、「漂着生物調査」「地域生物調査」等、野生水族に関する調査を行い、地域の自然史に関する知見の蓄積に努めている。2月14日には五十嵐浜に座礁したカマイルカを保護し、野生復帰に向け現在も治療を継続中である。

令和4年度も新型コロナウイルス感染症の影響で各種会議や研修会の一部はWeb開催となったが、他園館との最新情報の交換等を通して飼育技術の一層の向上を図った。また、日本動物園水族館協会生物多様性委員会との協力体制を維持し、絶滅の危機に瀕している種の保存に努めるとともに、調査研究を行っている。これらの様々な研究の成果をホームページで公開する等、新潟における水辺の環境・水生生物についての情報の収集・発信基地としての役割を担っている。6月まで開催した企画展示「新潟のタナゴ」など、絶滅が危惧されている希少種や、特定外来生物が生態系に与える影響についての情報を、状況に応じて積極的に発信している。

日本動物園水族館協会第67回水族館技術者研究会では、「カワヤツメの人工授精とアンモニーテス幼生の育成と展示」および「飼育下におけるシロウの育成と成熟」の2題を発表、新潟県環境企画課、新潟市環境政策課等が主催する、ちよ～生きもの発表会では、「打ち上げられた物は何?」を発表、新潟県愛鳥センター主催講演会では、「ウミガラスってどんな生き物?」を講演した。

また、当館がホスト館となり、3年ぶりのリアル開催として11月に新潟で実施した日本水族館協会第3回トレーニングセミナーでは、外部講師を招いた講演会や事例報告、フリー討論会が行われ、全国の40施設から集まった鯨類・海獣類トレーナーの技術の底上げに寄与した。

他の研究機関との水生生物に関する研究も積極的に行った。水産庁さけます等栽培対象資源対策事業の一環として、富山県農林水産総合技術センター水産研究所とアカムツに関する研究を行い、アカムツの親魚養成技術の開発を担当し成果を報告した。環境省生物多様性保全推進支援事業の「新潟県産コ

シノハゼ生息域外保全」として、コシノハゼの飼育と県内の生息地調査を行い、生活史および繁殖生態の解明を進めている。

他園館との共同調査では、ふくしま海洋科学館と ROV(遠隔操作無人探査機)による佐渡海峡海底の調査を行い、新潟県では初となるコクラゲの生息を確認した。2020 年に開始した長岡市立科学博物館とのスナガニ生息域調査を引き続き行った。

生体入手の困難な種の飼育展示のための調査・研究でも成果を得た。日本海を特徴づける魚類の展示種数を増やす努力をし、地域の自然の情報発信に努めた。

生物多様性保全ネットワーク新潟が主催する「親子魚探検隊」に協力し、水生動物相を調べ、在来生態系に悪影響を及ぼす外来生物の生息状況を明らかにした。NPO ネットワーク福島潟の「福島潟いきものしらべ水生動物観察会」に講師として参加し、水生生物について解説した。

今後も、より一層専門的な調査・研究に努め、その成果を市民へ還元していきたい。

(7) 総合学習等の受け入れ状況について

文部科学省の提唱に基づく学習支援活動としての「総合学習」の受け入れを行っている。質問・インタビューを通して、子どもたちに生き物や環境に関する知識を伝える場となっている。また、職業に対する関心を高めることや、職業・職種の内容や働く意義について考えを深めるキャリア学習の一環としての総合学習にも対応している。

令和 4 年度は新型コロナウイルス感染症により限定的となったが、学校の対応は令和 3 年度同様で、新潟市外の小中の修学旅行の利用が目立った。学校数は令和 3 年度とほぼ同じであったが、1 校あたりの人数が少なかったこともあり、若干減少した。ただし、数の評価としては、人数よりは学校数が重要と考えており例年並みの対応ができたと考えている。

来館した児童・生徒からは、多数の礼状や感想が寄せられた。水族館や水生生物への関心を呼び起こす機会や環境保全について考える機会として、また、社会に目を向け、働くことや学ぶことの意義や大切さを理解していく場として非常に役立っていることから、今後も可能な限り受け入れを行っていきたい。

(8) 実習生等の受け入れ及び講師派遣の状況について

実習生等の受け入れとして、専門学校生を対象に「飼育実習」、大学生を対象に「インターンシップ」「獣医実習」「博物館実習」を行うこととしている。しかし、実習生は県外からの学生が多く、職員との接触機会も多いことから、令和 3 年度に引き続き全て受け入れを中止した。博物館類似施設の一面を持つ当館にとって専門学校生・大学生に実習の場を提供するという社会的貢献はもちろんのことであるが、指導を通じて職員の研鑽の機会ともなっているため、今後受け入れを再開したい。

また、令和 4 年度は、水族館での教育をテーマとした調査研究について、2 つの大学から依頼があった。1 つは 4 年生による卒業研究で、もうひとつは 3 年生による地域実習での調査研究であった。どちらも館内で来館者へのアンケート調査を実施したいという内容で、来館者を対象とする研究であったことから、当館の「人を対象とする研究」についての審査を実施し、科学的・倫理的に問題がないことを確認した上で実施した。

その他、アウトリーチ事業の一環として、様々な「場」への講師派遣を積極的に行った。新型コロナウイルス感染症拡大の影響はあったものの、多数の依頼があり、小学校が 10 校、中学校が 1 校、小中合同が 1 校、専門学校が 1 校、また、社会教育施設である公民館から夏休み中の小学生向けの講座を依頼され実

施した。主に教室内での授業であり、テーマは「生きものについての話」「キャリア教育」が多かった。対象が小学校から専門学校と幅広く、また、派遣先のニーズに合わせた内容にする必要があることから、派遣職員の指導者としての専門性が要求される取り組みとなっている。

今後も、実習生受け入れやアウトリーチ事業を地道にそして積極的に行っていくことが、水族館と他社会とのつながりを強固にし、広げていく基礎となると考え、継続していきたい。

(9) 市民ボランティアの活動の状況について

ボランティア活動の目的を大きく「水族館(専門家)と来館者(非専門家)をつなぐ役割」「生涯学習の場」「自己実現の場」の3つとして活動をサポート、コーディネートした。

新型コロナウイルス感染症拡大の影響で、令和2年3年と2年連続で新規募集を中止したが、令和4年度は3年ぶりに新規募集した。過去最大の36人が新規に登録した。なお、まだ新型コロナウイルス感染症の影響があるため、活動する際には体調管理の徹底とマスク着用をお願いした。

活動状況は活動日数131日(令和3年度=54日、令和2年度=45日)、活動延べ人数358人(令和2年度=91人、令和1年度=65人)と新型コロナ感染症の影響前のレベルに少しずつ近づいているが、活動日数と延べ人数が多かった平成30年度がそれぞれ193日717人と比較すると半分くらいである。

今後は新型コロナウイルス感染症の影響が限定的になることが予想されるため、水族館・来館者・ボランティアの3者が満足できる活動を推進し、持続的なボランティア活動を目指していきたい。

(10) 広報および広告宣伝について

① テレビCMとラジオCM

テレビCMは、令和3年度秋に新規で制作した「いきものの、アレどこ?」を放映。また、県内、山形、福島テレビ局のCM付帯パブリシティ枠にて、時期に合わせたPRを多数実施した。TeNYではこれまで夕方情報番組内で月1回「わくわくマリンピア」を放送していたものを、「週刊マリンピア通信」として毎週金曜日の夕方に放送するシリーズに改変した。1回の時間は短くなるが、月1回から週末に放映することで週末の行き先として選択してもらうことを意図した。内容も飼育生物についての旬な情報を放映するように努めた。

ラジオCMは、BSNラジオおよびFM新潟で放送した。加えて、夏期はBSNラジオにて館内からの生中継と、スタッフがスタジオで生出演し、リスナーの質問に答えた。

② 雑誌・新聞などの紙媒体への広告

雑誌は、知名度が高い年刊誌(全国誌)及び県内の月刊誌(子供の遊び場特集)へ継続掲載した。新聞は、新型コロナ禍前に実施していた山形県・福島県・群馬県の新聞への広告を出稿した。また、令和3年度より実施している、産経新聞新潟・長野・山梨版で月2回生物コラム連載を継続して実施した。同じく令和3年度から実施していることも環境新聞エコチル新潟版へ、月1回生物情報の提供も継続して実施した。

③ WEB

オウンドメディアへの展開としては、当館ホームページ、Twitter、LINE@、Facebook、Instagram などの更新をより頻繁に行うことで、情報の拡散に努めた。また、現場の飼育スタッフが Twitter を利用しタイムリーな生物情報の発信に努めた。

3月にWebサイト内の「生物図鑑」のデザインや内容をリニューアルし、より検索しやすく見やすいものへと改善した。

また、有料WEB広告として、7月8月に新潟・山形・福島・群馬・埼玉へTwitter、yahoo、Instagramへ出稿した。

④ プレスリリースなど

プレスリリースは、各イベント・生物情報の提供を積極的に行い、全てのリリースに対して取材の申し入れがあった。ペンギンのタグ交換では、絶滅危惧種の保護活動と生物の多様性を維持する取り組みの、カマイルカ4回目の妊娠出産では、安定した飼育技術のPRにつなげることができた。

⑤ その他

「広告料」を必要としない誘客・宣伝活動も「広報」の一つとして位置づけており、その主なものとして、新潟県内の幼稚園や保育園、小学校や福島、山形、群馬県内の小学校にチラシを配送した。また、全国・地方テレビ番組からの生物に関する質問や写真映像等の借用依頼にも積極的に協力し、番組内で館名をクレジット表示してもらうことにより、館名と専門性の認知度向上に努めた。

(11) 他園館との協力について

上越市立水族博物館、ふくしま海洋科学館、大洗水族館、宮津エネルギー研究所丹後魚つ知館と生物交換、ふくしま海洋科学館とは共同で調査・採集活動を実施した。その他、しながわ水族館、海遊館、下関市立ものせき水族館、札幌市円山動物園、東京都葛西臨海水族園、いしかわ動物園、飯田市立動物園、よこはま動物園、市原ぞうの国、福山市立動物園とゴマフアザラシなどのブリーディングローンを行っている。

また、市民ボランティアの活動として実施してきた他園館視察は、新型コロナウイルス感染症防止のため中止していたが、令和4年度より再開し3月11日にボランティア13名、職員4名で上越市立水族博物館を視察研修した。

(12) 年間入館パスポートについて

令和4年度の年間パスポートの購入者は、16,029人(総入館者の3.1%)、パスポート利用者(購入者+リピーター)は88,772人(総入館者の17.2%)となった。また、パスポート利用者の平均入館者数は5.5回であった。

コロナ禍においては、総入館者数に対する購入者及び利用者の割合が共に高い状態を維持していたが、行動制限が軽減された令和4年度はその割合が下がり、コロナ禍前の割合に近い数字となった。それにもかかわらず、購入者数は過去最高であった令和3年度をさらに1,037人上回り、年間パスポートへの需要が潜在的にあることが改めて伺えた。従来から館内外で積極的に広報したことや口コミによるお徳感などが購入者の増加に繋がったと考えられ、特に例年実施している購入者へ館内のレストラン・ショップ

で使用できるクーポン券をプレゼントする「年パスキャンペーン」では、期間中、毎年多くの方に購入いただいている。今後も話題提供や特別展示などの情報提供を行い、年間パスポート会員に繰り返し来館していただくことが入館者増、ひいては当館への評価向上に繋がると考えられる。

また、新たな取り組みとして、従来のカード型に加えデジタル版の運用を 12 月から開始した。アプリをスマートフォンにインストールし、事前に氏名や住所、写真などを登録することで発行手続きに要する時間が短縮され、接触機会低減による感染予防や発行するカードの減少による経費削減にも繋がる。運用開始から、年間パスポートを購入された 4,971 人のうち、1,444 人、29.0%の方がデジタル版を利用されている。今後はデジタル版の普及率 50%を目標に周知を図っていききたい。

アンケート調査での「生き物の展示」について 97.5%の人が「非常に満足」「満足」と回答しており、テーマや季節感に沿った特別展示などを行い、生物の変化を発見できたことが評価されたと考えている。他にも「いつも楽しませてもらっています」「子供連れにとってもやさしい水族館であります」「毎週来ています。子どもたちは何度来ても飽きないみたいです」などの声のほか、「4 年連続イルカ誕生おめでとう！職員さん達みなさん大変な毎日だと思いますがこれからも頑張ってください」など励ましの声もいただいている。また、「次回パスポート購入予定は」との問いに対しては 90.8%の人からは「購入したい」と回答してもらうことができた。

今後も、生物の成長や変化が体感できる展示等を心掛け、リピーターに十分満足してもらえるようにしていきたい。

(13) 市・他団体等との協力

① 新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設共通割引券」の導入

新潟広域都市圏連携事業「文化・観光施設利用促進」により、「文化・観光施設共通割引」を実施した。新潟市だけでなく広域都市圏の方も割引料金で入館でき、新潟市では 8,061 人、新潟市以外では 1,304 人のお客様が利用された。

② 一般社団法人日本自動車連盟(JAF)会員割引

全国的な自動車ユーザー団体である一般社団法人日本自動車連盟と連携し、会員に対し当館のPRを行い、会員証提示で割引を行った。入館促進が図られ、50,193 人のお客様が利用された。

③ 内閣府が実施する「子育て支援パスポート事業」への協賛

内閣府の社会全体で子育て世帯を応援するという趣旨に賛同し、全国共通展開する「子育て支援パスポート」事業に協賛し、当該事業の会員に対し割引を行った。38,343 人のお客様が利用された。

④ マイナンバーカード取得者及び申請者への特典

11 月 1 日～3 月 31 日の間、新潟県のマイナンバーカード普及率を上げることを目的に、市営施設におけるマイナンバーカード所有者・申請済者向けに特典を付与した。新潟市水族館も対象となり、マイナンバーカードまたはマイナンバーカード交付申請済証明書を提示した新潟市民に割引を行った。期間中、2,087 人のお客様が利用された。

- ⑤ 第9管区海上保安庁による灯台記念日154周年展示イベントへの協力
10月29日、30日に第9管区海上保安庁による灯台記念日154周年展示イベントを当館アクアラボで開催した。展示パネルなどを海上保安庁が設置した。また、両日とも海上保安庁特別講座「うんこドリルでクイズ大会」を団体休憩室で開催した。
- ⑥ 小児病棟へのライブ配信
3月に県立がんセンター新潟病院小児病棟へライブ配信を行った。同センターでは入院中の病児への保育活動をボランティアが実施しているが、その活動時間に合わせZOOMを利用して実施した。入院している患児と保護者は小児病棟のプレイルームの大型テレビや病室で観覧していた。約1時間で日本海大水槽、個水槽、ペンギン、イルカショーなどをライブ配信した。令和5年度の実施も希望していることから、継続していきたいと考えている。
また、9月には新潟県内で小児がん患者や家族への支援をしているNPO法人ハートリンクワーキングプロジェクトからの依頼で、新潟大学医歯学総合病院小児病棟と県立がんセンター新潟病院小児病棟へライブ配信を行った。各20分くらいと短い時間ではあったが、子どもたちに喜んでもらった。
- ⑦ にいがた環境フェスティバル2022出展
11月6日、万代島多目的広場(大かま)で開催された、新潟県主催「にいがた環境フェスティバル2022」に出展した。出展ブースでは、海洋を漂うゴミをメインテーマとし、ミズクラゲと海を漂うビニールを対比させて展示したり、砂浜に打ち上がるマイクロプラスチックを選び分ける体験を行った。パネルもそれに合わせた海洋ゴミや生物への影響などの解説を掲示することで、よりSDGsを意識した展示とした。
- ⑧ 第4回ちょ〜生きもの発表会
当館もメンバーであるにいがたダイバーシティネットワークを母体とした生きもの発表会実行委員会に当館も参加し、企画・当日運営の一翼を担った。会場は新潟県立自然科学館で、他にオンライン配信もおこなった。参加者は約370名であった。オンライン配信では当館アクアラボのモニターでパブリックビューイングを行った。本発表会には新潟県内で生きもの調査研究をしているNPOや高等学校生物部、博物館などが参加し、10題の発表があった。当館からは「打ち上げられた物は何？」と題して漂着生物などの発表した。
- ⑨ ジュニア学芸員講座
本講座は、当館もメンバーであるにいがたダイバーシティネットワークが主催し、新潟県立植物園など市内にある6つの施設の協力で行われた。対象者は中学生・高校生で、7名が参加した。5月29日に新潟県立植物園で行われた第1回から12月3日までの全7回のプログラムで(11月の自然科学館は新型コロナウイルスの影響で中止)、当館は第2回の講座を行った。
- ⑩ 新潟市里潟研究ネットワーク会議への参加と上堰潟ガイドブック編集委員会への参加
新潟市環境部環境政策課が事務局となっている新潟市里潟研究ネットワーク会議に引き続き参加した。また、新潟市が実施し当ネットワーク会議が関与する「地域が主役里潟保全事業」で毎年作成しているガイドブックについて、「佐潟ガイドブック」の編集委員として当館スタッフが参加した。完成したガイドブックの表紙などに当館が撮影した空撮写真が採用された。

⑪ 小学校用ワークシートの制作・配布

小学校が校外学習で来館する際に利用できるワークシートを新潟市教育委員会の意見を伺いながら 2 種類作成した。作成については、教育委員会だけでなく市内小学校の先生方からも意見をいただいた。

⑫ パパママ水族館

市内で子育て支援を行っている NPO 法人との共催で 0～2 歳の子どもとその保護者を対象とした「パパママ水族館」を 3 月平日に 2 日間企画した。「子どもの預かり事業」と「大人向けプログラム」をミックスした企画で、子どもを預かっている間に大人へのレクチャーと自由観覧をしてもらうというプログラムである。令和 3 年度に当館主催で行った「大人のための水族館講座 乳幼児とその保護者」を踏襲したものである。定員を各日 4 組としたが、残念ながら応募がなく実施できなかった。令和 3 年度実施の際は応募多数で抽選となった人気企画であり、ニーズはあると考えられることから、問題点などを分析して今後の実施を検討したい。

3. 入館料収入の実績について

令和 4 年度入館料収入 434,637,276 円（対前年度比 130.0%）

入館料の徴収事務については、協定書に基づき適正に実施した。新型コロナウイルス感染症拡大の影響もあったが、入館者数は 514,910 人、前年度の 418,578 人から 96,332 人増加し、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標の 500,000 人を 3 年ぶりに達成した。入館料収入も 434,637,276 円で昨年度の 334,293,906 円から 100,343,370 円と大幅に増加し、「公の施設目標管理型評価書」の評価指標 452,500,000 円の 96.1%まで回復した。客単価も 844 円で昨年度の 798 円から 46 円上がり、最終的にはコロナ禍前の水準に徐々に戻ってきている。

収入増対策として、例年同様、学校の夏休みに合わせ、新潟市内の幼稚園・保育園、新潟市外県内と山形、福島、群馬の小学校へ割引券付チラシ（提示で 1 組全員 2 割引）を配布した。また、例年同様 12 月には冬場の閑散期対策として新潟市内の小学校、幼稚園・保育園に同様の割引券付チラシの配布などを行った。実施期間中、20,306 人の割引券チラシを利用したお客様が来館され、来館の動機付けに一定の効果があったと考えられる。

全国で共通展開する「子育て支援パスポート事業」では、38,343 人のお客様に来館いただき、昨年度と比較し 2 倍近い数字となった。県外からのお客様も増え、この割引制度が全体的に周知されてきたと思われる。また、新潟市内のお客様については年間パスポートへの移行に今後も期待したい。

また、リニューアル後導入した大手コンビニエンスストアのオンライン端末機で入館チケットが購入できる「コンビニチケット販売」や、同じリニューアル後導入した、会員証の窓口提示で 5 人まで 2 割引となる「JAF カード割引」も継続して実施している。

入館料の免除については、新潟市水族館条例・施行規則に基づき適切に実施しているが、今後も来館する幼稚園・保育園、小学校、高齢者施設、福祉施設など免除対象が増えることが見込まれる。当日の窓口対応や団体休憩室の予約など負担のかかる業務になることが予想されるが、状況を把握しながら不備のないよう行っていきたい。

4. 管理経費等の収支決算について

令和4年度は、ロシアのウクライナ侵攻により世界的にエネルギー価格をはじめ、様々な物価が高騰した。特に電気料金の高騰は著しく、水族館運営にも大きな影響を与えた。令和3年度と比較し、電気料金は約32,000,000円、ガス料金は約4,000,000円増加している。水族館は飼育生物の生命を維持するため24時間365日機械設備を稼働させ水温や水質を維持する必要があるため、大幅な節電が非常に難しいが、館内の室温設定や機械設備の稼働時間短縮など出来る限りの節電を行った。その他、時間外勤務の削減や物品購入の適正化を図るなど経費削減に努め、また、新潟市からは光熱費の不足分の一部、約20,000,000円を支援していただくことになった。しかし、電気代の高騰の影響は大きく、予算の範囲内に収めることが出来なかった。これは平成2年に水族館を管理して以来、初めてのこととなった。令和5年度はさらに厳しい状況が予想され、新潟市と協議・連携しながら対応していきたい。

修繕工事費については、リニューアル工事で未着手だった建物・設備箇所のほか、リニューアル工事で更新した建物・設備についても、不具合が生じてきており、その都度修繕工事を行っているが経費が依然として嵩んでいる。今後も大規模修繕が発生した場合や不具合が予想される場合は、市と協議しながら行ってきたい。

次期指定管理期間も「最小コストで最適な管理」を目指し、かつ、お客様への快適なサービス提供を図るという基本原則に則り水族館の運営を行っていきたい。

5. 自己評価に関する事項について

「公の施設目標管理型評価書」に記載のとおりである。

6. 最後に

令和4年度の入館者数は、514,910人(対前年度比123.0%)、入館料収入は、434,637,276円(対前年度比130.0%)で、新型コロナウイルス感染症の影響があったものの、令和3年度と比較し大きく増加した。「公の施設目標管理型評価書」の評価指標である入館者数500,000人も3年ぶりに達成し、入館料収入452,500,000円も96.1%まで回復した。5月8日からは、感染症法上の位置づけが「2類相当」から「5類」に移行されることから、さらなる入館者及び入館料収入増を期待したい。

年間パスポートは、購入者数が過去最高であった令和3年度をさらに上回り16,029人のお客様からご購入いただいた。新潟市民の年間パスポートに対する購入意欲は依然として高く、今後も購入者及びピーター数を維持または増やしていけるよう努めていきたい。また、12月から開始したデジタル版年間パスポートについては、発行に係る手続きの簡素化や経費の削減にも繋がるため普及率をさらに上げていきたい。

入館者の満足度については、アンケート結果によれば、展示生物全般で、「非常に満足」と「満足」の計が96.6%、イルカショー、解説プログラムで「非常に満足」と「満足」の計が94.4%と今年度も満足度は依然として高水準を保っており、「とても楽しめました。また来ます。」「楽しい時間でした」「見所がたくさんあって時間が足りませんでした」「イルカショーはたまに内容が変わるの出見応えがあり、子供たちも楽しんでます」「子供たちの好奇心を誘うような取り組み、環境への関心は子供に持ってもらうのが一番、ととてもよい」などの感想が寄せられており、多くのお客様に喜んでいただいている。また、「明るく清潔で心地よい場所でした」「スタッフの方のあいさつがきちんとしていて気持ちよい」「受付の方に親切におしえていただき助かりました」

など展示生物以外でも好意的な声が寄せられている。また、年間パスポート会員を除くお客様の来館回数については、「はじめて」が 36.9%(前年度 32.2%)と昨年度と比較し増加している。県外からのお客様は「はじめて」が全体の 62.0%と最も多く、まだ来たことがない観光客が潜在的に多いことが伺える。一方、新潟市内のお客様は、来館回数 4 回以上が全体の 69.7%と圧倒的に多く、今後も当財団が掲げるビジョン「新潟で一番愛される施設」を達成するため新鮮味のある展示を心掛け、何度も足を運んでいただける運営に一層努めていきたい。

施設・設備については、今年度、大規模修繕を 3 件予定していた。そのうち「日本海大水槽躯体改修工事」は入札不調により、「海水取水設備水管橋改修工事」はウクライナ情勢の影響で資材確保が間に合わなかったことにより次年度に延期となった。その他の施設・設備についても、突発的な不具合が十分考えられることから注意深く維持管理を行い、新潟市と協議しながら、早めの対応で事故防止を図りたい。

ソフト面については、従来のイルカショーやマリンサファリ給餌解説に加え、アクアラボ体験プログラムや磯の生きもの解説など体験型プログラムを従来どおり行った。新型コロナウイルス感染症拡大防止のため、イルカショーは内容の変更やショー時間の短縮を行っている。その他プログラムも、十分な感染対策を行いながら実施した。また、8 月 9 日には飼育しているカマイルカが出産したことに伴い 8 月 8 日～17 日の間、イルカショーを中止したが、事前に周知していたこともあり、当日来館されたお客様からはご理解いただき、混乱はなかった。その後、8 月 26 日からカマイルカ親仔の一般公開を行った。

高病原性鳥インフルエンザへの対策について、今シーズンは県内をはじめ全国各地の養鶏場で猛威を振るい、新潟市内においても 10 月 16 日に北区、1 月 6 日に中央区で死亡した野鳥から陽性反応が確認された。北区の発生を受け当館のマニュアルに基づき、野鳥の侵入を防ぐためペンギンエリアに防鳥ネットを設置した。さらに中央区での発生が水族館から半径 10km 以内であったことから、1 月 13 日から 2 月 1 日までペンギンエリアの観覧制限と常設解説を一時中止した。今後も渡り鳥が飛来する時期は様々な方向から情報を集め、マニュアルに沿った対応・対策を行い、来館者、職員、飼育生物を鳥インフルエンザから守ることを最優先に被害の防止に努めたい。

当財団は、平成 29 年 3 月に公益財団の認定を受け、令和 1 年度より単独で 5 年間の指定管理者の指定を受け 4 年目の管理運営を行った。世界的な物価の高騰が依然として続いているが、安定した水族館運営を行い、法人としても健全な経営ができるよう努めていきたい。

今後も新潟市水族館のさらなる魅力づくりを目指し、ビジョンである「新潟で一番愛される施設」となるよう平成 2 年の開館当初から培ってきた豊富な知識と経験を生かし、多くのお客様から喜んでもらえるよう、スタッフが一丸となって頑張っていきたい。